

「いっしょにいるのがあたりまえ」

～どの子にも居場所のある、居心地の良い学校づくりをめざして～

豊中市立新田南小学校校長 西口肇子

1 はじめに

本校は、通常学級18学級、支援学級7学級で、全校児童の約6パーセントが、支援学級に在籍している。支援学級に在籍する児童は、年々増えており、その多くは、発達障がいの児童で、その特性は実に多様である。

千里中央が近くにあるという立地条件から、他府県や他市からの転入や問い合わせも非常に多く「年度の途中からでも、支援学級に在籍して支援をうけることができるか？」や、「在籍したらずっと、支援の教室にいないてはいけないのか？」などの質問をよく受ける。

「支援学級在籍の児童も、通常学級でクラスの児童と一日一緒に過ごしていること。」や、「支援の必要な児童については学校全体で工夫をしながらできる限りの支援をしていること。」など伝えて安心していただくのだが、それが「あたりまえ」でない地域があるということが残念でならない。

時には、もめ事やトラブルも経験しながら、少しずつ仲間のことを理解し、人との望ましいかかわり方を学んでいく子どもたちを見ていると、一緒に過ごすことの大切さを痛感する。しかしながら、ただ、一緒にいるだけで子どもたちが成長するわけではない。私たち教職員がどのような視点で支援教育を行っていくのかが重要である。

支援の必要な子どもたちに、どんな支援や指導をしていけばいいのか？支援の必要な子どもたちを含む学級集団は、どのような集団であるべきか？また、どうやってそんな集団を作っていくのか？など、教職員の中で議論や研究を重ねながら、取り組みをすすめている。

2 本校の取り組み

(1) 幼保小の連携（良い出会いのために）

支援を必要とする子どもたちとの良い出会いのためには、就学前にどのような支援を受け、どのような育ちをしてきたのかを知ることが重要だと考える。そのため、可能な限り、校長と支援学級担任で園訪問をして、見学や聞き取りを行っている。また、保護者の思いや願いを知るために、面談を行い、入学するにあたっての不安要因を取り除くとともに、校内での準備を進めている。

(2) 小中の連携（将来の自立を目指して）

本校を卒業する（卒業した）子どもたちについては、進学先（公立中学校や特別支援学校）と連携を取り、お互いに授業の様子を参観し合ったり、具体的な支援の方法を交流しあったり、個別の教育支援計画が途切れないよう、引き継ぎを丁寧に行っている。

(3) 通常学級での取り組み（合理的配慮と基礎的環境整備をめざして）

- * 45分間静かに座って授業を受けるのが難しい児童のいるクラスではペアやグループで話し合う時間をもうけたり、体を動かす活動や、ギャラリーウォークを取り入れたりするなど、席を離れていい時間を作っている。
- * 弱視学級在籍の児童については、座席を窓側前方にし、斜面台やiPadを使用して、授業の理解をはかっている。また、体育では目立つ色のボールを使用することにより、他の子どもたちと一緒にゲームができるよう工夫している。
- * 聴覚過敏の児童がいるクラスでは、椅子にテニスボールをつけ音がしないようにしたり、校内放送の音量を小さくしたりしている。
- * 目からの情報に敏感な児童のいるクラスでは、様々な掲示物に反応して集中がとぎれてしまわないよう、授業中は掲示板にカーテンをしている。
- * 見通しが持てずにパニックになる児童のいるクラスでは、一日の流れがわかり見通しを持って学校生活ができるよう、スケジュールを見やすいところに掲示している。予定が変わった時には、前もって知らせ、混乱のないように配慮している。
- * 片づけが苦手な児童には、片づける場所に絵や写真を貼り、そこに戻す習慣をつけさせるようにしている。また、教科書やノート類の管理が難しい児童については、教科ごとに透明なファスナー付きのケースに入れ、色分けすることで、整理することができている。
- * 自分の言葉で気持ちや要求を伝えることが苦手な児童には、常に、支援者がそばで見本を見せ、トレーニングを積みかさねているが、それが難しい時には、写真や絵の「コミュニケーションカード」を利用している。助けて欲しい時には「ヘルプカード」イライラしたりキレそうになったりした時は、感情を知らせる「気持ちのカード」や行きたい場所を知らせる写真を使うなど、個々の児童によって、必要なツールを用意している。
- * 書くことに困難がある児童には、大きいマス目のノートを用意したり、薄く下書きをしたり、ノートに溝をつけてなぞらせたりしている。
- * なかなか課題に取りかかれない児童には、めあて（頑張ること）を明らかにしてきた時にごほうびシールを貼ることで、やる気をうながすようにしている。
- * 声の大きさや正しい姿勢、発表の仕方等、目で見てわかるような掲示を心がけ当番や係、日直の仕事についても、何をどうすればいいのかがひとめでわかるように工夫している。
- * 終わりの会や特別活動の時間等で、友だちの「いいところ見つけ」や「頑張っていたこと」を発表する取り組みを行っている。その中では、支援学級の児童も学級の中で認められる機会が多くある。
- * 何よりも、どの子にもわかりやすい授業を行うこと。頑張っていることを認め合う機会を多く持つこと。を心がけている。



(4) 支援学級での取り組み（個別の教育支援計画に基づいて）

* 個別の指導が効果的であると思われる児童については、保護者の了解を得て、支援教室で別課題に取り組んでいる。発達段階に応じた課題や教材を準備して、学習することもあれば、通常学級での音読や発表の練習をすることもある。

* 手先が不器用な児童については、一緒に折り紙や切り絵（貼り絵）等の制作活動を行い、作品を仕上げることで達成感と自信を持たせるようにしている。



* 身体意識が弱く動きがぎごちない児童数名については、通常学級での体育の授業以外に、異年齢のグループ体育をおこなっている。今年は、外部講師を招き、模擬授業のあと研修を受けた。体づくりだけでなく、敢えて勝ち負けのあるプログラムを取り入れることで、気持ちの切り替えを学ばせることも大切な要因であるとの助言をいただいた。

(5) 保護者との連携（共感と共通理解による信頼関係の構築をめざして）

主に日々の情報交換（学校での様子、家庭での様子）は、クラスや支援学級の連絡ノートでおこなっているが、それ以外にも電話や面談、家庭訪問など、密な連携を取っている。保護者の悩みや戸惑いに対しては、支援学級担任や通常学級担任だけでなく、管理職や養護教諭なども一緒に関わり、困り感に寄り添いながらも前向きな話し合いになるように努めている。また、必要に応じて、関係機関へ繋げるようにもしている。

(6) 教職員の研修（意識と資質の向上をめざして）

本校では、年度初めに、支援学級の児童について、その対応や支援の方法について全体で共通確認をおこない、年度末には、一年間の取り組みの成果と次年度に向けての課題を全体で検証するようにしている。

また、支援学級担任や通常学級担任はもちろん、全ての教職員が、支援の必要な子どもたちへの理解と、適切な支援や指導の方法を具体的に学ぶ場として、本校の教育相談員である臨床心理士の先生を講師に迎え、研修する場を持った。

その中で、個々の子どもたちへの的確なアセスメント（根拠に基づく）をもとに、苦手な部分を補い、ストロングポイントを伸ばしていくための取り組みが大切であることを再確認した。スモールステップでの成功を、先生や周りの子どもたちに評価される体験を積み重ねることにより自己肯定感は高まり、更にチャレンジするパワーが生まれる。そこを目指さねばならない。

支援の必要な子どもたちへの周りの大人の言葉かけや行動は、周りの児童のモデルになっているということを私たち教職員は肝に銘じなければならない。子どもどうしをつなぐ言葉かけができていないか？誰もが大切にされていると実感できているか？「～してはダメ！」という言い方は避け「～しましょう。」という表現を用いるようにしているか等、今後も検証していく。

(7) P T A への啓発（正しい理解のために）

ほとんどのクラスに支援学級の子どもたちが複数名在籍している本校の現状をふまえ、「支援を必要とする子どもたち（とりわけ発達障がい）」についての理解を深めてもらうための講演会を予定している。近年、保護者の発達障がいの児童への関心は高まっていると感じているが、正しい理解と適切な関わり方を共通確認する場としたい。

(8) 全校朝会での話（メタ認知のできる子に）

全校朝会では、子どもたちが自らをふり返り、不適切な言動を改め思いやりのある行動をとれるような内容を話すように心がけている。（『チクチク言葉』と『ほわほわ言葉』の話）

「上靴を隠した息子の話」「親切な上級生の話」「自分の汚れた顔は自分では見えない話」

「長すぎる箸を使ってどうやって食べればいいのか」etc)

また、「後出しジャンケン」を一緒にやって、いかに私たちが普段から勝ちたがっているか（負けるのが苦手）に気づくとともに、「あいこ」にするのは、楽しし安心だと感じさせたりもした。

3 成果と課題

どこの学校でも取り組んでいるような当たり前のことしかできていない現状であるが、幼稚園や保育園から「集団に入るのは難しい。」「指示が入りにくい。」「気持ちのコントロールができずすぐに泣く。」などの引き継ぎを受けていた現一年生の児童が、周りの児童と一緒に授業を受け、運動会にもしっかり参加し、落ち着いて笑顔で学校生活を送っているのを見れば、一定、本校の取り組みの成果はあったのではないかと考えている。

しかしながら、一方で、障がいがあるというだけでなく、家庭環境や学校での人間関係などに課題があるため、学校に来にくかったり、教室に入りづらかったりする子どもたちもいる。スクールサポーターや、教育相談員などとも連携し、管理職も含めて学校全体で支援を行っているが、校長室や保健室や支援教室や教育相談室が、居心地のいい場所だと言う。

そんな子どもたちの内なる力をエンパワーし、気持ちのエネルギーを充電させることは簡単ではないが、引き続き努力していく。そして、決して無理強いせず、学級（教室）にも居場所があることに、気づかせていきたい。

4 おわりに

「困った子」ではなく「困っている子」なのだと思えていても、子どもたちの「不適切に見える言動」については、理解しがたいことも多い。発達の背景、心理的背景、環境的背景が複雑に絡み合っているケースもある。だからこそ、その本質を私たち教職員が、きちんと理解して、アセスメントを行うことが重要である。その上で、適切な支援を行い、保護者と連携することで、二次的な諸問題は防ぐことができると信じている。

困り感や混乱を減らすための様々な工夫や配慮を行うことは、支援の必要な子どもたちだけでなく、全ての子どもにとって有効な支援であり、どの子にとっても居心地の良い集団づくりに欠かせない条件であると考えている。

個性も特性も含めてお互いが理解し合い、違いを認め合える集団。安心して間違いや、失敗ができ、責められない集団。そんな集団の中でなら、支援の必要な子どもたちも、「みんなと違うこと」や「できないこと」も受け止められるのではないだろうか。そして、そこに、頑張ったことを認め、喜んでくれる仲間や先生たちの存在があれば、自分を信じて前向きに生きていけるのではないだろうか。

まだまだ、課題はたくさんあるが、「どの子にも居場所があり、居心地の良い学校」を目指して今後も取り組みを進めていきたい。